

総括

サトウタツヤ
(立命館大学文学部)

4つくらいのことをお話したいと思います。質的研究の意義、オープンシステムと形態維持、TEM への批判をどう考えるか、対象者と3回会って話を聞くこととトランスビュー、ということです。そして最後に仲間になってください！というお願いをします。

質的研究の意義

まず、最初に質的研究の意義についてです。心理学自体が、かなり変わってきています。アメリカ心理学会が2012年に『心理学における研究方法』というハンドブックを出版しました。全3巻、A4で2500頁ほどの大きなハンドブックなのですが、その全ての論文の中の一番最初に収録されている論文がウィリッグによる「質的研究における認識論的基礎の展望」という論文です。研究方法のハンドブックの冒頭の論文が質的研究に割り当てられているということが、現在のアメリカ心理学の様相です。質的研究が心理学において大きな位置を占めているということがこのハンドブックから見てとれると思います。

そのウィリッグ (Willig, 2012) は、質的研究の定義について、「意味もしくは意味づけ (meaning) に関心をもつものだ」としています。さらに、質的研究志向をもつ研究者は主観性と経験に関心をもっている、としています。量的研究のように、人を「変数の乗り物」としてしか捉えずサンプルとして扱うのではなく、研究対象者の一人一人の主観や経験を重視するのが質的研究の基本的なスタンスなのだと思います。

ちなみに私は2012年3月にブラジル・バイア大学のバストス教授に招聘されてTEMに関するセミナーをやってきました。そういうオファーがくる時代になっているということです。そこで見させていただいたTEMは、私たちの想像をこえた部分もありましたが、TEMの良いところは概念ツールが同じだということです。必須通過点 (OPP) とか分岐点 (BFP) ということについては、たとえ国が違っていても、対象が違っていても、同じことを語ること

ができる。これは TEM の大きな強みになると思えました。

オープンシステムと形態維持

2つ目に、今日のテーマはオープンシステム（開放系）です。大事なテーゼとして、ベルタランフィ（Bertalanffy, 1968/1973）が、オープンシステムは等至点をもつと言いました。複線径路と等至点とオープンシステムは全て入れ子になった概念なのです。

オープンシステムということで、よく例に出すのは光合成です。光合成とは、「水と二酸化炭素を材料とし、葉緑体が光を受けてデンプンと酸素をつくりだす働き」、そういうプロセスです。みなさんも、そうした図を見たことがあると思います。専門的にはカルビン回路と言うそうですが、そういう図は理科でなかったと思います。しかし、こうした図式は構造であってプロセスではないんです。光合成の図式には時間は描かれていない。→（矢印）が複数描かれていたりしているので、人間が時間をよみとっているんです。いわば、プロセスの構造です。時間は構造に組み込まれているので、そのプロセスを描きたいというのが TEM の 1 つの目標です。

さて、葉っぱの例でも分かるとおり、表面的には静態的に見えるようでもその内部はダイナミックだというのがオープンシステムの特徴だということになります。静かなようでダイナミックであることを表すのが「形態維持(モルフォスタティス)」という概念です。マルヤマ（Maruyama, 1963/1984）が世に出した概念ですが、開放システムは絶え間なく環境と物質を交換し、影響を受けながらも定常状態を保つ。外界の状態が多少変動しようとも、さまざまな中で定常状態を保つために一生懸命維持をしているという見方になります。この形態維持という考え方は、家族心理学や家族臨床において、好ましくない状態が続いていることを表すのに使われているのですが、悪い状態ではなくても、普通の状態でも、表面は静態的だがシステムとしては動的（ダイナミック）ということはあるのだと思います。私たちの日常は、実は静かなものです。あるいは、悪いことが起きないようにと必死に頑張りながら、何らかの状態を維持していると言えるかもしれません。形態維持という概念によって安定的に見える日常的な生のあり方が描けるのではないかと、その可能性を感じているところです。

では、質的な変容はどのように表せるのでしょうか。「形態発生（モルフォ

ジェネシス)」という概念です。何か起きるということを生発と表します。

以下のことが私の経験であるかどうかは別として、ある少年が秋吉久美子さんという女優をTVで見ても好きになったとしましょう。「こんなきれいな人が世の中にいるんだ！」と感激したりしたわけです。しかし、冷静に考えれば、その時にその女優さんを初めて見たとは思えないわけです。その前にもおそらく見ていたはずなんです。あるいは、秋吉久美子さんではなくても同じようなインパクトがある女優さんのことは知っているはずなんです。しかし、そうした経験はその少年の心を動かさなかったのです。

ある人が、ある時、ある空間で、「秋吉久美子的なもの」に魅力を感じるというか、魅入られるというか、そういうことがあるわけです。こうした経験を形態生発（モルフォジェネシス）と表すことができると思います。記号という概念を用いれば、促進的記号が生発した、ということができると思います。同じ女優さんでも、一年前には促進的記号ではなかった。しかし、今は違う。おそらく少年の側の変容もあったのだと思います。記号という概念は心理学で用いる刺激という概念とは異なります。刺激という概念は、それを与えられた人に対して全て同じ機能をもたらずと仮定されています。記号は、そうではなく、その記号に接した主体と記号との相互作用こそが重要になってきます。

促進的記号というのは、記号の中でも、特に人を行為に駆り立てるもののことを言います。よく出す例として雪ウサギというのがあります（写真；福島大学・金澤等先生提供）。



このように福島の吾妻山の雪が残ること、これも記号になります。多くの人にとって、これは面白い形をした雪に過ぎません。しかし、近隣の農民の方々は、残雪がウサギの形になると、稲作を始めるのです。つまり、稲作を促進する記号、促進的記号として機能するわけです。大事なことは、雪ウサギだけで

も農民だけでも、促進的記号は成り立たないということです。

雪ウサギが現れるまでの山、つまり、山が全て雪に覆われている時期の山は、いわゆる農閑期です。前の年の収穫を終え、一休みして新年を迎え、そして次の年の稲作に思いをはせつつも、しかし、農閑期としての形態が維持された状態なわけです。そして、雪ウサギという促進的記号が発生して農作業が始まる。この時機—時機のキは好機到来！の機ですが—この瞬間こそが形態発生となります。そして、ここから実りの秋まで再び農作業を行うという意味で形態維持になるわけです。

これまでは形態発生のように目立ちやすい方に目が行きがちでしたが、現在は形態維持という考え方がおもしろいと思っています。

TEM への批判

3つ目の話題として、TEM への批判を取り上げましょう。TEM の抱える問題点として図が機械的に見えるとか複雑になりすぎてわかりにくいという批判があります。前者については、人生を線といくつかの楕円で描くなんて乱暴ではないか、ということなのだろうと思います。このことについて、最近、新たに考えるところがありました。2012年12月に出版される、ヴェルシナーの『文化心理学の構築 〈心と社会〉のなかの文化』^{注1}の中の第1章に、schemata「枠組抽出図式」と pleromata は「充満描写図像」の対比があります。これは絵画などを思い出してもらえればわかりますが、目の前にいる鳥を描こうとするときに、その骨格や輪郭を描くというようなやり方（枠組抽出図式）と、毛並みなどを細かく描いていくやり方（充満描写図像）とがあるのだと思います。この2つの概念を使ってみますと、TEM 的な質的研究は、前者、つまり「枠組抽出図式」にあたるのでしょうか。私たちとしては、人生を変数や要因に分解するのではなく、個々人の人生の流れを重視し、個人の人生の中で重要な出来事を抽出して、そこでおきている力のせめぎあいを描くことに意味があるんだ！と思っているのですが、場合によっては、サバサバしすぎの線画にすぎないもの、というように見えるのかもしれませんが。TEM 自体はどうしても「枠組抽出図式」になってしまうので、論文で個々人の人生を描く時には「充満描写図像」的に描写できるようにすれば良いのかなぁと思っています（そのためには個々人の言葉使いとか価値観のようなものをきっちりと理解して、それを論文に書くことが重要だと思います）。

トランスビュー (Trans-view)

4つ目の話題として、よく聞かれる問いに、何人の方を対象にすべきか、ということがあります。これについて私たちは、1/4/9の法則というのを提唱しています。これは経験則ですが、経験則だけに侮れないと思っています。また、人数から始めるのではなく、1人の人に3回会うことを前提にするべきだと考えています。1人に3回会うとして、何人に調査できるか、ということから1人にするか4人にするか9人にするかを定めるべきだと思います。なぜかという、調査者側の問題ではなく、相手の問題です。またしても例をだしますが、たとえば、中学生が皆さんの目の前にきて「大学生の恋愛の研究をしたい」と言ってきたらどうするか。中学生にどこまでしゃべったらいいか気になると思うんです。相手のやる気も確かめる必要があるだろうし、時間的制約もあるし、1回だけ会って全てしゃべることは考えられないと思います。1回きりのインタビューでしゃべることは果たして経験の重要な部分をカバーできるのか？ワンショット・インタビューはそうした危険を抱えていると思います。なので、最低3回会うことを勧めるのです。

TEM研究の仲間の中では、3回会う時に、2回目以降は単に会うのではなく、その都度、試行的なTEMを描いてそれを見せることを勧めています。そうすると、TEMを媒介にして会話をするのが可能になります。相手が、調査者がどこまで理解しているかをわかってくれる。おそらく、あることが描かれていない！などと不満をもつでしょう。しかし、その理由について考えれば、調査者の誤解なのかもしれないし、あるいは話者の方がしゃべってなかったからかもしれないのです。そして、しゃべってない理由は単に忘れていたからかもしれないし、どこまでしゃべっていいかわからずに遠慮したからかもしれない。いずれにせよ、納得がいけないことがあれば意見交換ができます。TEMの図を媒介にして相互理解を促進できるのです。そうなってくると、それはインタビュー (Inter-view) ではなくて、トランスビュー (Trans-view) が実現できると思います。このことはTEMの第2弾の本『TEMでわかる人生の径路』(誠信書房)に書かれていますので参照してください。

以上で4つの話題について、話を終えたいと思います。

最後に、2009年に出版されたTEMの1冊目の本(『TEMではじめる質的研究』(誠信書房))を読んだ人たちが、今回、2012年に出版されたこの『TEM

『でわかる人生の径路』の執筆者になっていることを、私は嬉しく思っています。TEMを用いる研究者が、集団として力がついているような感じがしているのです。これは大変ありがたいことですし、私としてはもう1冊出したいと思っています。今日、ここで発表した方々が、その執筆者になってくれると良いなあと思っています。TEMを通じて、「ゆるやかなネットワーク、軽やかなフットワーク」が実現できれば良いと思います。今日の発表も、1つとして同じテーマはないんだけど、TEMを使うことによって、分岐点（BFP）とか必須通過点（OPP）という共通の概念ツールを用いて現象を考えることができる、ということを知っていただけたと思います。これがTEMの魅力でしょう。また、TEMを用いると研究プロセスにおいて丁寧に考えることができる。TEMの図を描くことが問題ではなく、TEMの図を描くことで丁寧に考えることができ、いろんなことへの理解が進んでいくことがTEMの最大の特徴なのだと思います。

最後の最後に、大宣伝！ 今回の本『TEMでわかる人生の径路』では、各著者がなぜどのようにTEMと組みどのように論文を書いたのかという「Making of パート」についても書いていますので参考になります。今回の討論も参考になりますが…。

そして、先ほど述べたように、TEMの本は3冊までは私が関与して出版したいと思うので、ぜひ皆さんと一緒にやりましょう。集団として力をつけていきたいと思っています。

【引用文献】

- Bertalanffy, L. von (1968). *General System Theory: Foundations, Development, Applications*. New York: G. Braziller. (ベルタランフィ, L.フォン. 長野敬・太田邦昌 (訳) (1973). 一般システム理論—その基礎・発展・応用. みすず書房)
- Maruyama, M. (1963). The Second Cybernetics: Deviation-Amplifying Mutual Causal Processes. *American Scientist*, 5:2, 164-179. (マゴロウ マルヤマ・佐藤敬三 (訳) (1984). セカンド・サイバネティックス 現代思想, 12-14, 198-214)
- Willig, C. (2012). Perspectives on the Epistemological Bases for Qualitative Research. Cooper, H. (Chief Ed.), *APA Handbook of Research Methods in Psychology*(pp.5-21). APA; Washington.

【注1】

“Culture in Minds and Societies”（ヤーン・ヴァルシナー著）の翻訳書、『新しい文化心理学の構築 ―〈心と社会〉の中の文化』（サトウタツヤ監訳、2012年12月出版）の出版記念講演が、2012年12月24日（月・祝）に立命館大学で行われました。

質的研究・文化心理学の交差点 ―ヤーン・ヴァルシナー教授を迎えて―

- ◆日時 : 2012年12月24日(月・祝) 13:00~16:00
- ◆場所 : 立命館大学衣笠キャンパス 創思館 1階 カンファレンスルーム
http://www.ritsumei.jp/accessmap/accessmap_kinugasa_j.html
http://www.ritsumei.jp/campusmap/map_kinugasa_j.html
〒603-8577 京都府京都市北区等持院北町 56-1
- ◆企画 : サトウタツヤ(立命館大学文学部)・安田裕子(立命館大学衣笠総合研究機構)

◆企画趣旨

人は、さまざまな文化社会的な状況を身にまとい、時間とともに生きる存在です。そうした人のライフ(生命・生活・人生)を捉えることに、質的研究は重要な役割を果たしているといえるでしょう。それでは、人が文化をまどうとは、時間とともに在るとは、一体どういうことなのでしょう。文化や時間に焦点をあてることによって、なにがどのような有り様として見えてくるのでしょうか。このたび、アメリカ・マサチューセッツ州クラーク大学よりヤーン・ヴァルシナー先生をお迎えし、質的研究と文化心理学とがどういう位置関係にあるのか、そして、そうしたフレームを通すことによって、人の言動や、変わりゆくものと変わらないものが、どのように見えてくるのかを考えてみたいと思います。キーワードは、文化心理学、時間、語り、そして自己。それぞれのご関心に引き寄せて、人のライフに貢献できるような、なんらかの実りを持ち帰っていただければ幸いです。どうぞふるってご参加ください。

■13:00~14:00 講演 文化心理学の可能性

ヴァルシナー、初の日本語訳『新しい文化心理学の構築:〈心と社会〉のなかの文化』(新曜社)出版記念!
ヤーン・ヴァルシナー(クラーク大学):“Culture in Minds and Societies”

■14:10~15:30 シンポジウム 日本における質的研究のカッチングエッジ

話題提供

サトウタツヤ(立命館大学):「文化心理学における理論の役割―形態維持と発生の三層モデルの意義」
安田裕子(立命館大学):「時間のなかで重層化する不妊当事者の自己語り―不定、変容の循環のなかで」
白井利明(大阪教育大学):「時間的展望からみた人生構築」

指定討論:森岡正芳(神戸大学)、やまだようこ(立命館大学)、ヤーン・ヴァルシナー(クラーク大学)

司 会:田垣正晋(大阪府立大学)

※ 講演は英語で行われますが、日本語の概説が付きまます。シンポジウムは日本語で行われます。

◆主催 : 立命館大学生存学研究所

科学研究費 若手研究A「不妊夫婦の喪失と葛藤、その支援―見えにくい選択経路を可視化する
質的研究法の応用的展開」(研究代表者:安田裕子)

◆共催 : 「ナラティブと質的研究会」(代表:やまだようこ)

科学研究費 基盤研究A(海外)「多文化横断ナラティブ・フィールドワークによる臨床支援と対話教育
法の開発」(研究代表者:やまだようこ)

◆後援 : 日本質的心理学会